対象作品／森絵都著『カラフル』文藝春秋

『カラフル』

弘前市立南中学校　三浦心華

「黒もあれば白もある。
赤も青も黄色もある。
明るい色も暗い色も。
きれいな色もみにくい色も
角度次第ではどんな色だって見えてくる。」

この世界は、自分の見方によってはカラフルにだってできる。この物語を読んで、自分の心に響いた言葉です。

主人公の「ぼく」は、生前に大きなあやまちを犯して死んだ、罪の魂です。二度と生まれ変われないはずなのに、急に現れた天使から

「抽選に当たった。」

と言われます。抽選に当たった魂は、人生の再挑戦のチャンスを得て、生きている人間の体に「ホームステイ」し、自分の罪を思い出さなくてはなりません。「ぼく」は前世の記憶が一切ないため、すべて自力で前世のあやまちを見つけることになります。

ホームステイする人間の体の持ち主は、自殺を図ってもうすぐ死んでしまう「小林真」という少年。一体何があって自殺を図ったのかが気になり、どんどん読み進めました。前世のあやまちが、この自殺に関係しているのかなども気になりました。

真の両親は、優しいけど性格が少し荒く、兄も勉強はできるけど、真のコンプレックスをいじってきます。学校のマドンナ的存在の少女は、自分本位でほしいもののためならなんでもします。「ぼく」のサポート役の天界から降りてきた天使の「プラプラ」は、口が悪く思ったことをすぐに口に出します。登場人物たちはみな魅力的です。

実は、いじめられて生きるのが辛くなって自殺した小林真の魂が「ぼく」でした。前世のあやまちを見つける過程で、世界の見え方に色がついてきて、この世界はいろんな色であふれている、と「ぼく」は気づきます。ホームステイとは単なる魂の修行ではなく、いちど自分を捨てた魂が、もういち

ど自分に戻れるかどうかのテスト期間だったのです。

私がこの小説を読んで一番考えたのは、「一度きりの人生で自分は何をしたいのか」ということです。そのために何を頑張るべきなのか、将来は何をしたいのか、その夢を叶えるためには何が大切なのか……。

私が好きなことは誰かにとっては嫌いでもあるし、私にとって嫌いなことは誰かの好きでもあります。いろんな意見があって、個人の考え方も様々です。だからこの世界は、〝カラフル〟なのだと思います。

私は苦手な人がいても、我慢したり、少し遠目で見ることが多いです。だから、嫌いな人を突き放すのではなく、その人のいいところをしっかり見て理解できるようになりたいです。そしてこれからは、もう少し自己主張もして、自分を強くしてきたいです。

「ぼく」は、小説の最後でこう言います。

「ときには目のくらむほどカラフルなあの世界。あそこでみんなといっしょに色まみれになって生きていこう。それがなんのためだかわからなくても。」

私の人生は「ぼく」とはちがって一度きりなので、再挑戦やホームステイなどはありません。だから、〝カラフル〟なこの世界で迷わないように、自分としっかり向き合っていきたいです。

この先、いろんな色を取り込めなくなって苦しくなることもあるかもしれません。だけど、私はいろんな価値観をもって、カラフルにできるよう、しぶとく生きようと思います。